

英訳聖書各種訳にみるリーダビリティの違い

成 田 修 司

ABSTRACT

The purpose of this paper is to compare the different translations of the Bible in terms of readability. The understanding the Bible plays an indispensable role to appreciate the western cultures, yet few endeavors have been made to illustrate the differences in readability between various versions. All of the versions selected for the analysis are widely circulated in all English speaking countries. Excerpts from the Scripture are first analyzed using an online tool and other computerized tools. The results were then compared with my subjective opinion of them. Some stylistic features of the translations are also briefly examined to see how they influence the readability. This study will hopefully assists teachers and students to choose an appropriate translation of the Bible to better understand Christianity.

1. は じ め に

現在市場に流通している聖書の英訳版には多くの種類が存在するが、それらをリーダビリティやスタイルの面から分析し、英語圏文化理解あるいはリーディング素材のための聖書選定の一助としたい。この目的のため特に分析した翻訳は *King James Authorized Version*, *New International Version*, *Good News Bible*, *New American Standard Bible* の四点である。この四点に絞った選定基準は後に詳しく述べるが、主に流通量と翻訳方針を考慮したものである。分析箇所は旧約聖書の「創世記」からの抜粋が中心である。分析方法はコンピュータによる自動分析やオンラインツールを利用し、更に実読による分析を加えて考察とした。聖書の各翻訳はインターネットで広く公開されており、テキストのデジタルデータが容易に入手可能であった点も付け加えておく。

2. 分析に利用した翻訳の選定基準

1611年に発行されて以来、*King James Authorized Version*（以下 KJV）は英語国民の間で確固たる地位を維持してきた。日本の英語学の祖と言われる市川三喜は「欽定英譯聖書は文學上の一大傑作として英文學史上に重要な地位を占め、文體は簡素にして威嚴あり、力強く且韻律的である」と述べている。この翻訳は歴史的に重要な意味を持つばかりではなく、21世紀となった現代でも *King James Only Movement* と呼ばれるいわば「欽定訳至上主義」があり、いまだに数多くの愛読者がいる。このため聖書の分析対象としては最初に選ぶべきと考えた。そして他の翻訳版の選定であるが、似たものばかりを選ぶことにならないよう、主に流通している翻訳版をまずその翻訳方針ごとに分類した。そもそも聖書を

翻訳する場合、Eugene Nida によると形式等価または逐語訳 (formal equivalent, or word for word) か、それとも示されている概念を正確に伝えようとする動的等価または意識 (dynamic equivalent, or thought for thought) にするかという、相反する基本方針が存在する。翻訳の分類方法としては他にもあろうが、ここでの分類は翻訳方針が逐語訳か意識かあるいは中間的かという点で大雑把に分け、その上で各分類から流通量の多いものを選定した。最終的に選定したのは次の4翻訳であり、括弧内は初出版年度である。

1. *King James Authorized Version* (KJV : 1611)
2. *Good News Translation* (GNT : 1966)
3. *New International Version* (NIV : 1973)
4. *New American Standard Bible* (NASB : 1971)

3. 選 定 理 由

先に選定済みの KJV の文章は詩的效果や荘厳さなども狙っているものの、比較的原典に忠実であるとされているので逐語訳の代表としても検討できる。そして対照的となる意識組からの代表としては、1966年に初出版され Nida の理論に従って訳された意識版としては最も初期の一つである *Good News Translation* (以下 GNT) を選定した。1991年の Gallup Poll では GNT は “the most popular version in Britain”. であり、利用者が多いというのも選定理由のひとつである。逐語訳の代表、意識の代表と揃ったところでそれらの中間的存在も比較対象にすることを決めた。キリスト教書店教会 (Association for Christian Retail, 以下 CBA) の2009年11月の発表によれば、現在全ての翻訳の中で最も販売数の多いのは *New International Version* (以下 NIV) である。発行元の Zondervan 社によると NIV の翻訳理念は “The best balance between word-for-word and thought-for-thought” であり、彼らが公表する「逐語訳・意識の連続指標」では NIV はほぼ中間地点に位置している。そのため中間的存在としてはこの上ない候補と考え選定した。最後の *New American Standard Bible* (NASB) は現在流通している翻訳の中では最も逐語的度合いが高いという点で選定した。発行元の Lockman Foundation によると、NASB は “widely embraced as “the most literally accurate English translation” from the original languages” であり、先の Zondervan の「逐語訳・意識の連続指標」でも逐語側の端に位置し、KJV よりも更にその度合いが高い。しかしながらその文章は17世紀に書かれた古典である KJV とは異なり現代的で、逐語訳同士でも現代文と古風文ではリーダビリティがどの様に異なるのかという点にも強く興味を持った。

4. 分析個所と方法

自動分析で使ったテキストの量は信頼性とパソコンでの扱い易さを考慮して、1000語とした。分析個所は後に実読による分析も加えるために、何度か読んだ経験があり内容に多少でも馴染みのある「創世記」から選ぶことにした。その中でも3章と4章は以前に注

目した文章があったので、3章の冒頭から1000語を分析箇所とした。正確には3章全てと4章1節から14節まででGNTの場合でちょうど1000語だったので、他の翻訳は多少の語数差を無視し同一の箇所を比較対象とした。

単語のカウント方法ならびに自動分析はオンラインで公開されている青山学院大学の「英文語彙難易度解析プログラム」(以下 Word Level Checker)を主に利用した。Word Level Checkerは株式会社アルクが開発した標準語彙水準リスト12000語(以下, SVL)をベースにしたもので、リストは1000語毎に12段階の難易度に分けられている。分析テキストの推奨語数は1000~3000語ということである。任意のテキストをコピー&ペーストすれば、単語数のカウントを始め各種の自動分析を実行できるようになっている。その他 Microsoft Word に標準搭載されているツールの、Flesch-Kincaid Grade Level (以下 FKG) のリーダビリティ・チェックも利用した。実読による分析は主観の域を出ないが、上記の箇所に加えて「創世記」6章(ノア方舟)、マタイ等も比較して考察を加えるものとする。

5. 比較・分析項目

単語数をカウントした結果、単語総数のばらつきはNASBの1095からNIVの980であった。長文において1割程度の総語数差はリーダビリティに与える影響は低いと仮定して分析の対象とはしていない。それから特にKJVの場合、文章中に完全なセンテンスの形を取らないfragmentが多く、切れ目が判然としない箇所が相当数存在する。つまり文法的な句切れを探すのか、単にピリオド等で判断するのかでセンテンス数が大きく変化する。Word Level Checkerでは単にピリオドもしくは疑問符で終わる箇所までを一文とカウントしている。この方法では疑問も残るため、センテンス数も直接の分析対象から外した。ただしこの自動解析されたセンテンス数は後のリーダビリティ指数に影響を与えるので、この点に関しては後述する。最終的に自動分析を行ったのは次の5項目である。

1. 総異なり語数 (Word Types)
2. 総語数に対する異なり語数 (Type/Token Ratio: TTR)
3. 単語平均長さ (Average Word Length)
4. 語彙レベル分布 (Word Level Distribution)
5. リーダビリティ指数3種 (Flesch-Kincaid Grade Level, Automated Readability, Coleman-Liau)

以上5項目の中で今回中心に据えたのは4番目の「語彙レベル分布」である。これらの自動分析の後に実読を行い、自動分析結果が実読の主観的判断とどのように関係しているのかを探った。

6. 自動分析の修正方法とその基準

Word Level Checker による分析では各単語の難易度ごとに 1 から 12 までの番号が自動的に振られ、分類される仕組みとなっている。ベースとなる語彙リスト 12000 語に存在しないものは“unknown”（以下、不明語）というタグが添付される。不明語のままでは分析に困る。実際に文章を読んでみると、自動分析で不明語となった語彙は必ずしも語彙リストよりも難易度が高いものばかりではないと思われた。そこで不明語は全て一定の基準を設けて、一つ一つ手作業にて各難易度に再分類した。一定の基準とは次の通りである。

1. “r”, “s” など、単独のキャラクターが単語として選り分けられた場合、「1000語レベル」とする。
2. “firstborn” など、「1000語レベル」の単語同士が複合語となっている場合は、「2000語レベル」とする。
3. KJV の古風表現, “thy”, “doth”, “hath”, “gavest”, 等, その他動詞の語尾に “-th”, “-st” で終わるものは、動詞そのものが「1000語レベル」であり、かつ学習者が該当する法則を学習するという前提で「2000語レベル」とする。
4. Adam, Cain, Eden 等の固有名詞は全て「固有名詞」として別に分類する。
5. その他主観的に SVL のレベルを超えと思われる一般語は全て「over レベル」として別分類する。

Word Level Checker では分析した全ての単語 (Type) を抽出し、各単語にレベルを添付したものを Excel に変換できるツールが利用できる。自動分類された語彙のレベルをこの一覧で確認し、その上で主観的ながら SVL の分類基準に近づけるよう上記の基準を設けた事を追記しておきたい。それから聖書であるから随所に “god” が現れるが、この語も不明語に分類されていた。この語は主観的判断から「1000語レベル」とした。結果としては不明語の全てが、「1000語」、「2000語」、「over」、「固有名詞」のいずれかに振り分けられた。次項からの分析結果は本稿で便宜上「自動分析」と呼ぶが、以上の主観的判断を含むものである点を了承頂きたい。

7. 自動分析結果その 1 (語彙レベル分布)

語彙レベル判断による難易度は、予想通りであったが GNT が最も低く、KJV が最も高いという結果が出た。以降の配列は比較しやすくするため、難易度の低いものから高いものへ順に並び変えた。各翻訳の語彙レベル毎の語数は次の表 1 の通りである。固有名詞は文章内容への新密度を無視すれば、学習者の語彙サイズと直接関わらないものと仮定して分析に影響を与えないよう、1000語レベルよりも低いレベルとして扱った。

表 1 のデータを基に各語彙レベルの語数をそれぞれの総語数で割り百分率を求め、低レベルからの累積語彙サイズ毎のテキストカバー率を一覧にしたのが表 2 である。累積であ

表 1

	GNT	NIV	NASB	KJV
固有	20	23	21	25
1,000	858	830	940	770
2,000	43	36	34	102
3,000	41	40	39	40
4,000	14	15	16	16
5,000	6	9	15	10
6,000	10	7	4	8
7,000	3	9	13	12
8,000	2	3	3	2
9,000	0	1	2	39
10,000	0	3	1	10
11,000	0	0	0	1
12,000	2	2	0	2
over	0	2	7	15
総語数	999	980	1095	1052

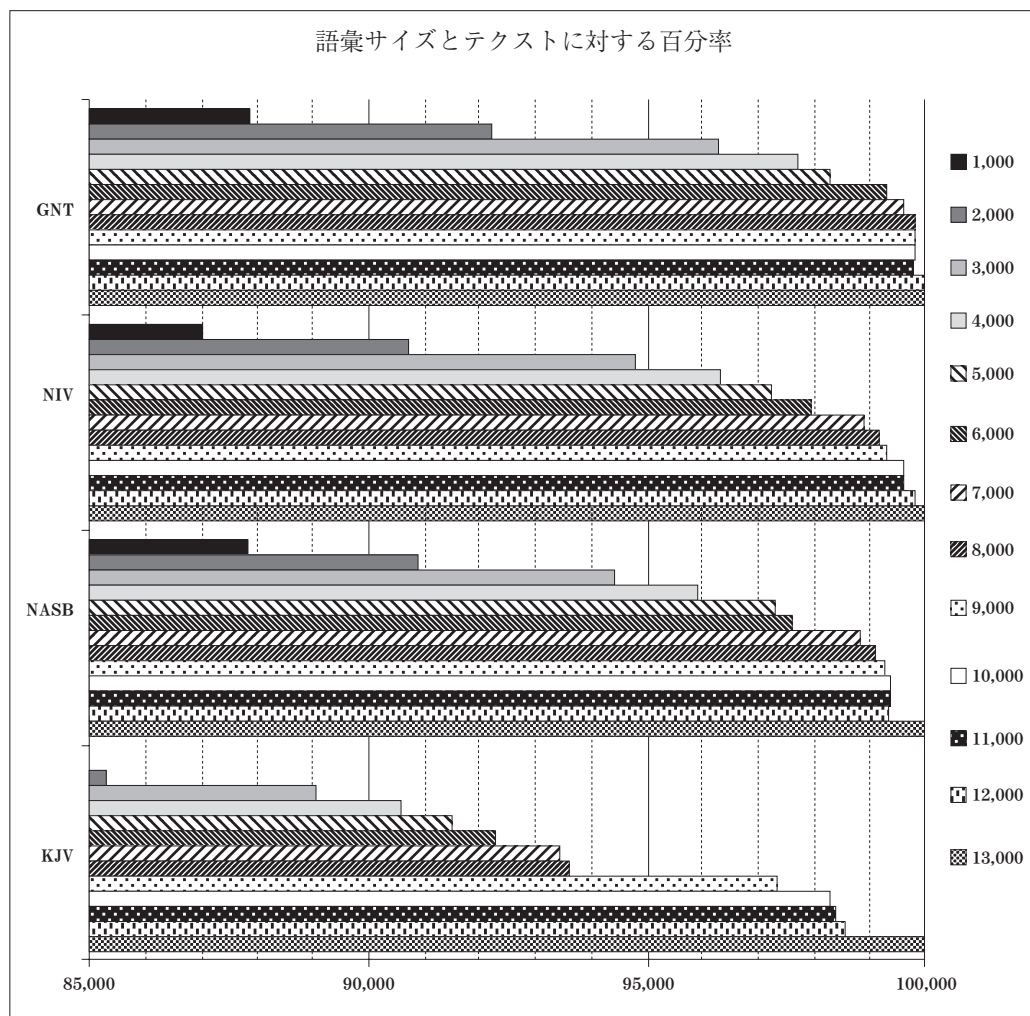
表 2

	GNT	NIV	NASB	KJV
固有	2	2.35	1.92	2.38
1,000	87.9	87.04	87.76	75.57
2,000	92.2	90.71	90.87	85.27
3,000	96.3	94.8	94.43	89.07
4,000	97.7	96.33	95.89	90.59
5,000	<u>98.3</u>	97.25	97.26	91.54
6,000	99.3	97.96	97.63	92.3
7,000	99.6	<u>98.88</u>	<u>98.82</u>	93.44
8,000	99.8	99.11	99.09	93.63
9,000	99.8	99.29	99.27	97.34
10,000	99.8	99.66	99.36	<u>98.29</u>
11,000	99.8	99.66	99.36	98.39
12,000	100	99.8	99.36	98.58
over	100	100	100	100

るから表 1 と異なり、各語彙レベルの包括範囲はそれより低いレベルを全て含んでいる。Nation (2001)らの研究では内容理解のため95%の語彙数が最低限必要であるという事から、カバー率が95%に達する語彙レベルの数値を太字で示している。また Nation は「最低限理解できるレベル」ではなく pleasurable reading のためには98%の語彙が必要と報告していることから、98%に達するレベルは下線で示している。そして表 2 をグラフに表したのが次の図 1 である。

Nation によれば通常のテキストを「満足いく程度に理解できる」のに必要な語彙数は最低2800語で、「楽しむため」には5000語必要との事である。今回の3000語レベルを大雑把に2800語に相当すると仮定してここまでの分析でわかるのは、3000語で95%の閾値を越えられるのは GNT だけだが、NIV も NASB もその差は 1 パーセント未満であり、ここまでは事実上彼の主張が確認できたと考えてもよからう。しかし楽しむためには98%の語彙数が必要と言えるなら、NIV, NASB 共に6000~7000語必要という事になり、今回の分析では5000語ではやや苦しいという結果となった。それから KJV はいわゆる「普通のテキスト」の範疇から外れると思うが、やはり語彙分布の面からも非常に難易度が高く、95%の閾値を超えるには他の翻訳と比べて 2 倍から 3 倍の語彙サイズが必要という結果となった。興味深いのは GNT で、この訳はもともと先の Nida の「動的等価」理論に従って、外国人や子供・一般人にも理解しやすい聖書を作るため翻訳されたものである。とは言っ

図 1



でも厳密な制限語彙で書かれているのではなく、3000語で閾値を越えた後も4000、5000、6000とどのレベルからも語彙が出現し、最終的には数は少ないものの12000語レベルの語彙まで使用されている。そして表の数値から判断する限り、NIVとNASBの語彙分布は非常に近く読みやすさは殆ど同じ水準にあると言えることになる。

8. 自動分析結果その1 (リーダビリティ指数)

今度はそれぞれのリーダビリティ指数を比較してみたい。次の表3は各翻訳の自動分析で得られた数値の一覧である。

Typeの数で比較すると、全体的にはほぼ横並びと言ってよい。むしろ語彙分布分析で難易度が高いものの方が、Type数が少ないぐらいと言える。TTRも当然のことながらそ

表 3

	Types	TTR	文長さ 平均	単語長さ 平均	指数		
					FKG	ARI	Coleman
GNT	272	0.27227	16.9	3.8	4.3	4.9	4.8
NIV	250	0.2551	18.8	3.8	4.7	5.9	5.0
NASB	240	0.21918	25.2	3.7	6.0	8.6	4.8
KJV	239	0.22719	27.1	3.8	5.7	10.0	5.5

れに応じた結果となっている。平均単語長さもどれも実用上同じと言ってよい数値が出ている。これらの数値を見て判断する限り、リーダビリティはどれも殆ど変わらないということになるが、それでは先の語彙分布の結果とは全く異なることになる。続いてリーダビリティ指数の比較では、どの指数でも GNT より KJV の数値が高くなっているものの、FKG と Coleman でその差は学年換算で 1 年かそこらに過ぎない。しかも FKG では KJV が NASB より数値が低く、Coleman では NASB が NIV より低いという、語彙分布分析の結果とは逆転現象が起こっている。しかし ARI では GNT から KJV へと順当に高い数値へと移行していて、語彙分布分析の結果を裏付ける形となっている。参考までに青山学院大学の染谷の ARI による分析では、易しいビジネスリーダーで 7 点程度、米国大統領の就任演説で 10～11 点程度の結果が出ているという事であるから、主観的判断からすると全体的にもう少し高い点数が出ててもよさそうな気がするが、この点に関しては後述する。

もちろんこれらの数値は膨大な聖書のテキストから僅か 1000 語だけを抽出して分析した結果であるから、語数を増やしたり分析箇所を変えたりすれば指数は変化する可能性がある。ちなみに「創世記」全体を見ると語数は約 6500 語あり、FKG の指数は 7.1 となり、「マタイ 5 章」全体では 6.7 という結果となった。前述の Zondervan 社で公開している聖書各翻訳の一覧比較表では、各翻訳の特徴の説明とともに Grade Reading Level も公開されている。残念ながらどんなリーダビリティ指針を利用しているのか明記されていないが、その数値は興味深いのでここに記しておきたい。次の表 4 がそれであるが、本稿で分析した 4 種類の翻訳以外はここでは省略する。

表 4

GNT	NIV	NASB	KJV
6.0	7.8	11.0	12.0

Grade Reading Level という名称から推測すると FKG を使った指数である可能性も考えられるが、本稿の FKG を使った分析結果よりもだいぶ高めの点数が出ている。本稿では最も高い点数の出た ARI での分析結果と比べても、更に 1～2 年分高い指数が示されている。筆者の主観的判断ではかなり共感できる数値であるが、この点に関しても後述する。

9. 自動分析における限界点

Word Level Checker による分析ではベース辞書にある語彙の難易度はあらかじめ決められている。そのため、単語によっては複数の意味を持ち、それぞれの難易度が異なる場合は最も易しい意味で判定されることになる。現実的には当然の事ながら同じ語でも特定の意味により難易度は大きく変化する。KJV の「創世記」においては例えば次のような例を挙げることができる。下線は筆者の追加である。

1. Now The serpent was more subtil than any beast of the field which ... (創世記 3 : 1)
2. Therefore the LORD GOD sent him forth from the garden to Eden, to till the ground ... (創世記 3 : 23)
3. And Adam knew his wife; and she conceived, ... (創世記 4 : 1)

1 に挙げた subtil (現代的綴りでは subtle) はここでは「ずる賢い」の意であり、この意を知らない者は英語圏に育つ聖書にあまり詳しくない若者にも多い。2. の till は「地面を耕す」の意味で、3 の know は「性的関係を持つ」であり、conceive は「妊娠する」である。当然 Word Level Checker ではこれらの語は実際のレベルよりはるかに易しいレベルとして扱われることになる。参考までにこれらの語を単独で入力してみると、know は 1, till は 2, subtle, conceive は 4 という結果がでた。KJV で多用されるこれらの古風な意味は前もって学習しておかないと、時には母語話者でも理解の妨げとなり得る。ましてや日本人学習者にとってはなまじ既知の単語が使われているだけに、未知の語彙よりも混乱する原因となり得る。これらの文を残り 3 訳と比較すると、リーダビリティを改善しようと努める翻訳者の方向差が垣間見え興味を引く。次の表 5 は残り 3 訳の同一箇所からの抜粋である。先ほどの箇所に加え、他に注目すべき箇所にも下線を付してある。

表 5

GNT	NIV	NASB
Now the <u>snake</u> was the most <u>cunning</u> animal that ...	Now the <u>serpent</u> was more <u>crafty</u> than any of the wild animals ...	Now the <u>serpent</u> was more <u>crafty</u> than any beast
So the Lord God <u>sent them out</u> of the Garden Of Eden and made them <u>cultivate the ground</u> ...	So the Lord God <u>banished</u> him from the Garden of Eden to <u>work the ground</u> ...	therefore the LORD God <u>sent him out</u> from the garden of Eden, <u>to cultivate the ground</u>
Then Adam <u>had intercourse with his wife</u> , and she <u>became pregnant</u> .	Adam <u>lay with</u> his wife Eve, and she <u>became pregnant</u> ...	Now the man <u>had relations with his wife</u> Eve, and she <u>conceived</u> ...

これらの文を見ると、KJV で問題となり得る箇所は残りの翻訳ではほとんど修正されていて、現代英語においてより一般的表現へと改められているのが確認できる。

しかしリーダビリティに影響を与える要因はむろん語彙だけではなく、文化的知識程度の差異も大きい。語彙レベル分布上は NIV と NASB は同程度だが NASB は逐語訳の度合いがより高いので、現代人には理解しがたい比喻表現や度量衡がそのまま訳されている。例えば次の文では NASB で使われているメタファーが NIV では除去されている。下線部がその箇所である。

And I will put enmity between you and the woman, and between your offspring and hers; he will crush your head, and you will strike his heel.” (NASB 創世記 3 : 15)

And I will put enmity between you and the woman, And between your seed and her seed; He shall bruise you on the head, And you shall bruise him on the heel.” (NIV 創世記 3 : 15)

When you cultivate the ground, it will no longer yield its strength to you. (NASB : 創世記 4-12)

When you work the ground, it will no longer yield its crops for you. (NIV 創世記 : 4-12)

この例を見ると NASB より NIV の方が語彙レベルが高いとは言えないが、比喻程度が高いため文章の難易度は明らかに高くなっている。また度量衡の面に注目すると、NASB は貨幣単位と長さにそれぞれ talent と cubit が使用されているが、NIV では貨幣単位は talent であるが、長さは feet に書きかえられている。これが GNT や、今回は分析対象から外したが他にも意識版として人気の高い *New Living Translation* ではどちらも dollars, feet が使われている。原語に登場する単位をそのまま使用するのは、それとも現代人が利用する単位に訳すのと、どちらが「本物の訳」なのか論ずるのは難しいが、少なくとも適切な文化知識がなければ原語の単位そのままでは難易度が高くなるのは推測できる。これらの点から、たとえ表面的な語彙レベルでは同等でも NASB は NIV よりリーダビリティは低くなることになる。

ここまでの自動分析結果をまとめると、今回の分析結果に限定して述べれば TTR の数値は横並びで、実際のリーダビリティの差を表せなかったということになる。リーダビリティ公式による指針では、FKG と Coleman では明白な差が表せなかったが、ARI ではある程度現実的な指数が得られたということになる。ただし双方とも文の長さを判断に入れているが、文法上意味が分割しているが表記上ピリオドが少ないため Word Level Checker が文の数を実質少なめにカウントしている点を考慮に入れる必要がある。FKG は単語の音節数を考慮に入れているため、単語長さ平均に差のない今回のサンプルの分析で指数に有意な差が見られなかったのは妥当である。しかし ARI と Coleman はどちらも音節数に依存せず、単語長さ文長さを使って分析しているにも関わらず、Coleman では有意差が

見られず、ARI ではほぼ妥当と言える指数が得られたのは興味深い。ARI と Coleman の詳細な分析方法の差については本稿の意図ではないためここでは比較しないが、いずれ機会があれば詳しく検証してみたい。

10. 自動分析による指数と実読による主観的判断との差異

これらの数値を実読による主観的判断と比べると、ARI の GNT から KJV までの数値の上昇度は筆者の主観的判断と最も合致していると感じられる。ただ実際の学年レベルとして考えてみると主観的にはもう少し高く感じられ、その点では全体的に先の Zondervan 社の指数が最も妥当と感じられた。Zondervan の指数でも GNT と NIV の差は1.8学年分しかなく、NIV と NASB 間は3.8学年分離れている。語彙分布の分析からはどちらも楽に読むため（98%の既知語）には7000語レベルの語彙が必要であることから、GNT と NIV の差は少なくとも2学年分の差が生ずるべきというのが筆者の主観である。しかし NASB には比喩表現や文化知識を要求する文章も多く、この点では KJV にも難易度の面で引けを取らないため両者で近い指数が得られているのは充分納得できるところである。

だが何と言っても KJV が難しいとされる最大の要因はその古風な文語体に依るところが大きい。Zondervan の説明でも KJV の Readability は “Difficult to read due to 17th-century English vocabulary and word order” としており、その理解し難さが故に後に続く多数の別訳を生み出したと言えよう。実際には KJV は1611年の発刊「当時においてすら既に archaic と感ぜられる言葉を豊富に使用」（大谷）している。前述の市川も「当時の英語に比べて一段古いと云ふ事が、聖書の英語をしてその時代既に dignified な崇高な感じを與へさせた原因であつたに違ひない。」と述べている。この点で NASB は逐語訳の度合いが更に高くとも現代文であるから、遥かに読み易い（リーダビリティが高い）ということになる。

表面的な言語的特徴を離れ、文化的知識・比喩表現・時代背景などの知識の必要性も考慮に入れると、KJV はもちろんのこと GNT に至るまで全ての翻訳において聖書のリーダビリティは表面的な言語的特徴のみから判断した指数より1～2学年分程低くなるというのが筆者の主観である。先の青山学院大学の調査では難しいサンプルの場合で FKG, ARI, Coleman のいずれでも14～15程度の指数が得られている。また試しに Charles Dickens の Christmas Carol, Oliver Twist, A Tale of Two Cities 等の抜粋でも FKG の指数を見てみたが、得られた指数には6～15程度とばらつきがあった。筆者が以前に読んだことのある作品であるが、主観的には難易度に関してあまり差異は感じられなかったものである。Dickens の小説などは英語圏の子供にも結構難しいものであり、KJV や NASB も楽に読むにはこの程度の学年（中学卒業程度）の知識を必要とするだろうというのが筆者の推測である。

11. 各翻訳のスタイルの比較

各英訳聖書の文章を比較し、そのスタイルを文学的価値あるいは芸術的完成度を論じる

のは本稿の趣旨ではない。ここでは自動分析の結果も踏まえ、表面的な語彙・構文センスと、それらがリーダビリティにどのような影響を与えているかをごく簡単に検討したい。前述のように古くから KJV のスタイルは「簡素にして威厳あり，力強く且韻律的」（市川）とされ，数多くの文が iambic, trochaic, anapestic 等の伝統的英詩韻律パターンに当てはまることが指摘されている（Sightler）。またイザヤ，詩篇，ヨブ記などは free verse の原型とも言われる（Kirby-Smith）。ジェームズ王の翻訳者たちは英語に翻訳するにあたり，原語の持つ詩的韻律を多少なりとも残そうとしたとされる。それと比較すれば確かに現代語訳は，韻律性では程度の差こそあれ KJV に及ばないようである。例えば先の「創世記」3章の冒頭文は，大雑把に anapestic（弱弱強格）の韻律を取っていると言える。例文中の「×」は弱拍で，「/」は強拍を表す。

× × / × × / / × × / / × × / × × /
Now the ser | pent was more | subtil than | any beast | of the field | which the LORD |
God had made. (KJV)

同箇所 NIV と GNT での韻律は次の通りだが，もはや特定の韻律型を当てはめることは困難である。

× × / × × / / × × / × × / / × × / × × /
Now the ser | pent was | more crafty | than any | of the wild | ani | mals | the Lord | God had
made. (NIV)
× × / × × / / × × / × × / / × × / × × /
Now the snake | was the most | cunning ani | mal that | the Lord | God hed made. (GNT)

NASB の該当箇所はここに示さないが，KJV と類似していた点を付しておく。もちろんこの一文の分析のみからそれぞれの訳の全体傾向を断言できるわけではないが，主観的には今回読んだ範囲に置いて同様の傾向を感じた。KJV 以降の翻訳は全て KJV の訳も参考にしながら翻訳したことは想像に難くない。それでいて韻律が多少なりとも犠牲となっているのは，理解しやすさや文法的正確さなどの他の要素を優先させた，もしくは韻律にはあまり配慮せず翻訳を行ったと考えられる。

また，今回の分析文を読んでみると顕著な特徴の一つに，次の様な副詞句や主語を前に出す倒置と並列が随所に見られる。

upon thy belly shalt thou go, and dust shalt thou eat (KJV 3:14)
cursed is the ground for thy sake ; in sorrow shalt thou eat (KJV 3:17)
for dust thou art, and unto dust shalt thou return (KJV 3:19)

これらも同じ個所を NIV や GNT と比較すると興味深い。次の表 6 がそれである。GNT においては倒置や並列などの語順上の修辭的技巧は全く使用せず，全て標準的な語順に改められている。対する NIV は上の例に限らず，ごく大雑把に言って半分程度 KJV

表 6

NIV	GNT
You will crawl on your belly and you will eat dust	you will crawl on your belly, and you will have to eat dust
Cursed is the ground because of you ; through painful toil you will eat	the ground will be under a curse. You will have to work hard
It will produce thorns and thistles for you, . . .	It will produce weeds and thorns, . .
for dust you are and to dust you will return.	You were made from soil, and you will become soil again.

の語順を活かそうとしているようである。単純に考えると標準的語順の方が読みやすいわけだから、この点では GNT が最も読み易いことになる。それから聖書の文章には全て節番号が付されているため、殆どの訳では意味上の区切り箇所では番号を付け易いように構文を組み立てている。しかし GNT だけは聖書全体をあたかも一つの連続した小説であるかのごとく書いているので、付された節番号はあくまで後付けに過ぎない。そのため一つの文にまとめて節番号を付したり、番号が不定詞に付されていたりする場合がある。自動分析の結果からは GNT は一文当たりの平均単語数は少ないはずだが、実際に読むと複合文が多く構文の種類は豊かである。対する KJV はその全編通して "And ~, then ~" の様に同じパターンの繰り返しで、構文の多様性は低い。同じ観点から残り2訳を見ると、NASB は KJB 寄り、NIV は GNT 寄り、それぞれ ARI の指数と同じ順番で構文の多様性の差を感じた。

12. 結 論

英訳聖書のリーダビリティは例えば小説のオリジナルと graded reader を比較するのと異なり、原語の言わんとする意図を余すことなく伝えるという使命がある限り、易しくすると言っても一定の限度があると言える。その制約の中で GNT は可能な限り易しい語彙を使い理解しにくい比喻なども除去して、基礎的3000語で95%の閾値を超える程リーダビリティを高め、なおかつ12000語範囲の豊かな語彙も使用しつつ原文の豊かな教義内容を伝えている。また構文は標準的かつ多様性に富んでいて、英語を学習する日本人あるいは外国人にとって英作文の模範的文章とすべきものと言える。NIV は教養ある大人でも満足させる豊かな語彙と、逐語訳と意識の絶妙なバランスを兼ね備え、英語圏で最も人気の高い翻訳というのは納得できるところである。NASB は逐語訳の度合いが最も高いため、キリスト教を文化知識や時代背景を含めて時間をかけて学習したい場合は最適であるが、初めて手にする聖書としては少々敷居が高いと言える。KJV はその豊かな語彙・古風な表現・逐語訳度の高さ等から、実質上リーダビリティは非常に低く読解の難易度は相当高い。また構文は多様性を欠き、黙読すれば散漫さや冗長さ等も感じられるが、朗読を聞くとその定型化された文は一変して詩的で耳に残る韻律となって響く。そして何よりも英語文化

を代表する英訳として、四百年間読みつがれてきた古風な文語表現を読むこと自体が伝統を守る喜びとなり得る。その意味ではリーダビリティが低い事さえも KJV が持つ独特の魅力であるとも言え、その色褪せることの無い文章はこれからも何世紀にもわたり英訳聖書の基準であり続けるだろう。

参 考 文 献

- 青山学院大学. (2009). 『Word Level Checker 英文語彙難易度解析プログラム』.
http://www.cl.aoyama.ac.jp/english/newSite/wlc/index_J.html (2009年11月6日)
- 市河三喜. (1937). 『聖書の英語』. 研究社.
- 宇津木 長. (1979). 「欽定英訳聖書の英語について (上)」. 『鹿児島経済大学論集』. 20巻2号, 49-74.
- 宇津木 長. (1979). 「欽定英訳聖書の英語について (下)」. 『鹿児島経済大学論集』. 20巻3号, 171-202.
- 大谷泰照. (1969). 「英語聖書の研究——Style と Syntax——」. 『桃山学院大学人文科学研究』. 6巻1号, 59-76.
- 小野澤由紀子. (2006). 「英訳聖書の歴史と特徴 (1535～1560)」. 『新島学園短期大学紀要』. 第26号13-28.
- 清川秀男. (1978). 「リーダビリティ研究の概観」. 『淑徳大学研究紀要』. 第12号, 65-82.
- 志子田光雄. (1980). 『英詩理解の基礎知識』. 金星堂.
- 高野進. (2008). 「現代英語聖書における翻訳の問題」. 『経済系』. 関東学院大学. 第234集, 97-108.
- 寺澤芳雄. (1989). 「聖書と英語文化」. 『東京女子大学紀要論集』第40巻1号, 107-114.
- 中條清美, 長谷川修治. (2004). 「語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学入試問題の難易度」.
 『日本大学生産工学部研究報告』. 第37巻, 45-55.
- Association for Christian Retail. (2009). *CBA Best-Seller List of Bible translations*.
<http://www.cbaonline.org/nm/BSLs.htm> (2010年10月8日)
- Leech, Geoffrey N. (1969). *A Linguistic Guide to English Poetry*. Longman.
- Lockman Foundation. (2009). *New American Standard Bible: Background and History*.
<http://www.lockman.org/nasb/> (2010年10月8日)
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.
- Kirby-Smith, H. T. (1998). *The Origins of Free Verse*. University of Michigan.
- Sightler, James H. (2003). *Why The English Of The King James Bible Is Better Than That Of All The Modern Versions*.
http://www.bible1611.com/EndofAgeMessages/Sightler_KingJamesBible02.htm (2010年10月8日)
- Zondervan. (2009). *New International Version*.
<http://www.zondervan.com/Cultures/en-US/Product/Bible/Translations/New+International+Version+%28NIV%29.htm?QueryStringSite=Zondervan> (2010年10月8日)